

# 「学び舎 見虹色コンパス」

## R3. 2. 19 読売新聞 本校のキャリア教育支援事業「虹色コンパス」が紹介されました



今年度学んだことをまとめた動画をスマートフォンで発表する生徒たち（1日、県立聾石高で）



昨春秋に開かれた軽トラ市では、友好都市で採れたお茶の販売に挑戦（まちサボネ石提供）

### 夢に向け主体的に行動

#### 学び舎 見虹色コンパス

郷土と歩む

#### 県立聾石高校

#### 「虹色コンパス」

聾石町の県立聾石高校（小原由紀校長、生徒数75人）では今年度から、生徒自身が学びたいことや深めたいことを、校外の組織や人と連携しながら進めるキャリア教育支援事業「虹色コンパス」が行われている。

「将来の夢を実現するため、何をすべきかきちんと考えられていました」。同校で1日、1、2年生約50人が虹色コンパスの報告会を行った。生徒たちはグループに分かれ、「車の整備士になるために何をすべきか」「マ

イナススポーツに興味を持ち、子どもたちにポッチャを教えた」など、各自が取り組んできた成果について、スマートフォンでまとめた3分間の動画を発表したり、意見交換したりした。

虹色コンパスは、同校と同町、国立岩手山青少年交流の家、NPO法人などと連携して開催。人生百年時代の羅針盤にしてほしいとの思いが込められている。県内各地の高校で、地域探究プログラムを行うNPO法人「いわてNPO-ONE Tサポート」（北上市）の菊池広人事務局長（49）が講師を務めている。

1年生らは今年度、「友好都市の静岡県富士市のお茶が、コロナ禍で売り上げが減少している」という課題に取り組み、町内で昨年10月に開かれた「元祖軽トラ市」でお茶を販売した。その後、班ごとに別の課題に取り組み、小田島真人さん（16）は、町で生産者が減少している白炭について取材し、動画を作成した。小田島さん

は、「自分たちが作った動画で、興味を持ってくれる人が増えれば」と話している。

2年生は、保育園や図書館など、自分の興味のある職場と各自で交渉し、就業体験をした。町立御所小で3日間体験した沼崎悠さん（17）は「普段やりとりしない社会人と関わり緊張したが、コミュニケーション能力が上がった」と手応えをつかんでいた。

生徒の発表内容は、国立青少年教育振興機構が先日、オンラインで開催した全国大会で特別賞を受賞するなど、成果も上がっている。菊池事務局長は「今後も生徒たちが広い視野を持ち、主体的に学べる環境を整えていきたい」と意気込んでいる。

#### 苦勞を伴うが 必ず役に立つ



有村瑞希記者

高校の時から自分の将来を真剣に考え、地域の人々からサポートを受けられる授業は、大変意義深い。記者は千葉県の県立高に通っていたが、座学が中心で、学外で地域の人々と一緒に活動する授業は、

読売新聞出前授業  
読売新聞盛岡支局は、学校に記者を講師として派遣する出前授業を行っています。

9.6.5.3.1441へ。

※読売新聞 2021年2月19日付

※この記事は読売新聞社の許諾を得て転載しています